

エトニーとネーションの系譜学

Anthony D. Smith, *The Ethnic Origins of Nations*. (Blackwell, 1986)

筒井清輝

アンソニー・D・スミスはロンドン大学社会科学の教授であり、「英語の読者にとっては、この分野における現在の中心的案内人である」(Hobsbawm, 1990, p. 2)と言われるように現在のナショナリズム研究における第一人者の一人である。彼は、ナショナリズム研究の出発点である『ナショナリズムの理論 (Theories of Nationalism)』から『20世紀におけるナショナリズム (Nationalism in the Twentieth Century)』、本書などを経て、最近著の『ナショナル・アイデンティティー (National Identity)』に至るまで数多くのナショナリズム関係の著作・論文を発表している。そこではナショナリズムについての直接の関心に加えて、近代性とか文化、共同体、エリートと大衆といった社会学における主要な問題が常に顔を見せており、それらに対するアプローチの手がかりとしてナショナリズム研究が選ばれているとも思えるほどである。特に近代化の持つインパクトについては、初期の著作『社会変動という概念 (The Concept of Social Change)』のころから強い関心を寄せており、近代社会とそれ以前の社会との連続性・断絶性は本書でも中心的な問題となっている。また、方法論的には歴史社会学的立場に立った上で、特に歴史的事実を重視しており、地域的・時間的に驚くほど広い範囲に渡る学識が比較文明史的視点にもかなりの深みを与えている。

本書はネーションとかエスニック・グループといったものが古代から中世、近代という歴史の流れの中でどのように変容していったのかという問題を扱った文明史的な研究であり、彼の幅広い学識が遺憾なく発揮された作品といえよう。本書の構成を簡単に紹介すると、彼の問題意識を明らかにする序章、ナショナリズム研究の現状を紹介する第一章に続いて、第二章から第五章までが第一部「前近代におけるエスニック・コミュニティ」を、第六章から第八章までが第二部「近代におけるエトニーとネーション」を構成し、第九章が二つの部をつなぎ合わせる結論部分となっている。

まず序章では、彼の問題意識が、ネーションをめぐる現代の国際社会の現実と研究者の間でのアカデミックな議論の双方を源泉とし、ネーションとはいつ出現したものなのか、取り分け近代とそれ以前の間にあるのは連続性なのか断絶なのか、という点にあることが

示される。そして、そうした関心から、「ネーションの系譜学 (genealogy of nations)」とでも言うべきものの確立が目指されることになる。

本論に入る前に、ネーションに対するアプローチの仕方、その歴史性の捉え方に関する現段階でのさまざまなパラダイムを整理した第一章を概観しておこう。ネーションの本質・起源についてのナショナリズム研究者の立場は、大きく分けて「原初主義者 (primordialist)」と「近代主義者 (modernist)」の二つに収斂する。前者の中にも、ネーションを家族や身体と同様に自然で所与のものとするよりラディカルな立場と、それが自然なものかどうかは別にして、ネーション的な集団はそう呼ばれていないものも含めて太古より存在するとする「永続主義者 (perennialist)」の立場の二つが存在する。他方近代主義者の立場は、ネーションが太古から不変の集団原理などではなく、比較的最近生まれた、柔軟性を持つ集団原理であるとする点で共通しているが、その分析の重点の置き方によって①経済的基盤を出発点とする立場、②政治学的分析をより重視する立場、③近代の文化に注目する立場の三つに分けられる。スミス自身の立場は結論部分で明らかにされるが、簡単に言うと、行き過ぎた近代主義者の立場を修正し、やや劣勢にある原初主義者の視点に再び注目するというものであろう。この意味で彼は永続主義者の立場に最も近いといえるのだが、彼自身も言っているように前近代のネーション的な集団と近代のネーションの間に連続性を認めるのならば、それを何らかの形で実証的に証明できなければならない。この作業は特に前近代についての資料の乏しさから極めて困難であるのだが、彼はその手がかりをネーションのシンボルとか神話といった要素に求めている。それが果たしてどの程度有効なものであるのか以下で見ていこう。

まず、第二章「エスニック・コミュニティの基盤 (Foundations of Ethnic Community)」では、彼がエトニー (ethnie) と呼ぶ前近代の民族集団の特徴が描き出される。彼はエトニーを「ある名前で指される、共通の神話と歴史、文化を持ち、特定の土地との強いつながりと強い連帯感を共有する集団」と定義付け、それが、いつの時代にもはっきり確認できるわけではないが、見え隠れしながらも連綿と存在し続けたとする。そして、その形成・発展に重要な要素として、①定住化とそれに伴う集団意識の発達、②組織化された宗教の存在、③集団間の紛争などを挙げているが、その分化をもたらす最も初期の文化的差異の発生は現在の研究レベルでは解明しがたいとしている。

続いて、第三章「歴史上のエトニーとエトニズム (Ethnie and Ethnicism in History)」では、集団感情の一般的特性であるエスノセントリズム (ethnocentrism) とエトニーの防衛のための集団行動であるエトニズム (ethnicism) とが区別して論じられる。そして、エトニズムが作り出しエスノセントリズムが守っていく、ミソモチュール (mythomoteur) と呼ばれるさまざまな神話-シンボル複合体も、王朝的 (dynastic)

なものと共同体的 (communal) なものとに区別される。王朝的なミソモチュールは宗教的色彩を帯びることもあるが、本来貴族階級や官僚などの支配者集団がその地位の正当性を示すことを目指して流布するものであり、その意図は政治的である。一方共同体的なミソモチュールは社会全体の中から育まれ、それを表象するようなものであり、ギリシャやイタリアの都市国家におけるような市民社会的・政治的なものと、ユダヤ人やアルメニア人、アラブ人などに見られる宗教共同体的なものがある。そして、民族的・宗教的感情の双方を備えた宗教共同体的なミソモチュールが最も強力な影響力・動員力・永続性を持つという。

そのようなミソモチュールが実際のどの程度集団の統合に有効であり、支配者層と農民層の距離はどれほどであったのかという問題が、第四章「農耕社会における階級とエトニー (Class and Ethnie in Agrarian Societies)」で扱われる。ゲルナーら近代主義者は、農耕社会では支配者層と農民層の文化的断絶が大きく、共同体の文化的統合は果たされなかったとしているが、この議論には実証的な裏付けが必要だろう。(Gellner, 1983) 古代については実証的検討のためにはあまりに資料が乏しく、せいぜい限定的な証明が精一杯であろう。そして、中世以降の研究から確認されるのは、やはり、支配者層はミソモチュールを有効なものと考えていたが、それが農民層まで広く浸透した事例は少ないということである。しかしスミスは、戦闘行為においてプロの傭兵を雇って戦うか民間からの徴兵によって戦うかによって大きな違いが生じるという。王位継承や領土の配分に関する上流階級の間の争いに多い前者の場合には、支配者層と農民の間の溝は埋められなかったが、集団全体の存続の危機に見られるような後者の場合には人々の所属意識が高まり、恒常的にそのような状態にある集団の場合文化的統合もかなり進むことがあるというのだ。この軍隊の構成に関する二分法をヒントにして、共同体そのものも、貴族による水平的・外延的なエトニーと民衆による一体感のより強い垂直的・内包的エトニーの二つに分類される。前者は、貴族階級の自らの地位に対するアイデンティティーとそれに伴う使命感の強さによって、かなり強力で永続的なものとなるが、その地域的領域は不明確で、ラテン語キリスト教世界やアラビア語イスラム教世界といった広い範囲に拡散していることも多い。一方後者は、宗教的・血縁的紐帯に基づく共同体で、かなりの文化的統合が果たされており、その接着剤としては宗教が大きな役割を果たしている。この二つのタイプは、実際には明確に区別できるものではなく、また時間の経過と共にあるタイプからもう一方のタイプへと移行していくこともしばしばである。そして、近代主義者の主張を裏付けるように、強力で記録に残るのはほとんどが貴族的エトニーの方であるが、民衆的エトニーも歴史の片隅でしっかり存在していたことも忘れてはならない。ここでもスミスの、原初主義者に伍するわけではないが行き過ぎた近代主義者の主張は修正されねばならない、という歴史社

会学者として穏当な立場が垣間見える。

第五章「エトニーの存続と解体 (Ethnic Survival and Dissolution)」では、前章で示唆されたエトニーの変容に焦点を当てた議論が展開される。このような問題については、一般に領土を持つこと、主権を持つこと、人口が安定していることなどが重要とされるが、スミスはそうしたことから、その共同体に独特の文化や生活スタイルの存続が重要であるとする。例えばポーランド人のように侵略され主権を失っても、独自のアイデンティティを保持し続けた集団の例は多いし、人口の減少も単純に数的な問題ではなくそれに伴う文化的要素の衰退が問題であるという。そして、エトニーの存続に必要な条件としては、貴族的エトニーの場合にはその王朝的ミソモジュールを共同体的なものに移行し、民衆を同化していくことが、民衆的エトニーの場合にはその共同体的ミソモジュールを支える宗教的基盤が安定していることなどが挙げられる。宗教の役割はどちらの場合にも大きいが、新しい環境に適応できることや広い範囲に浸透し新しい世代を社会化する役目を果たすことなどが特に重要であるという。

この宗教が圧倒的に重要な前近代世界に、近代の世俗的価値が浸透していく変動の中にネーションの生まれてくる契機が存在するのであり、それが第二部の主要な問題となっている。第六章「ネーションの形成 (The Formation of Nations)」では、まず、どのような経緯を経て近代がネーションの時代となったのかという問題が取り上げられる。スミスは、ネーションを形成し、その有効性を高めたのは西欧で起こった経済・行政・文化の三分野における「三つの革命」であるとする。経済の領域では資本主義への移行が中央集権的な経済体制を確立し、同質的な経済システムを各国内に作り出し、政治の領域でも軍事的・行政的統括権が一元的に国家に託され、その統一を促進した。教育や文化も国内の同質性を高めるのに貢献し、アンダーソンが言うような出版資本主義の役割や、E・ウェーバーがフランスの事例において指摘するような教育の役割は重要であり、さまざまな分野で宗教色を薄め、文化的同質性を高める動きが進んでいった。(Anderson, 1983: Weber, 1970) 以上のような分析は、近代化論とナショナリズム研究の既存の業績を接合し整理したものであり、スミスのオリジナリティーが見られるのは、次に提示される領土的ネーション (territorial nation) とエトニックネーション (ethnic nation) という二つのモデルにおいてである。スミスは、「三つの革命」は断続的・漸進的に進行したのであり、その過程でさまざまなモデルが出てきたが、その中でも同じ領土に住むことを基盤にし、市民権や法概念を重視する領土的ネーションと、既存のエトニーが政治化することで生まれるエトニックネーションの二つのモデルが重要であるという。この二つのモデルは現実にはどのような展開を示したのか。彼は、西欧諸国では領土的ネーションが非西欧諸国ではエトニックネーションが初めに現れるが、後に前者では内的分裂を防ぐために文化

的同質性が必要になりエトニー的ネーションへ、後者では社会の発展と国際社会で認められるために領土的ネーションへそれぞれすり寄っていき、両者が収斂してくるという。結局、彼のエトニーとネーションとの弁別基準は、市民権とか法制度を重視するかどうか、つまり近代西欧的価値が取り入れられているかどうかという点にあるのだ。これは、現実の近・現代史を参照すると納得できる面もあるが、西欧的ネーション・モデルを絶対化しているというクーパーの批判はもっともであり、西欧中心主義の匂いがすることは否めない。(Kuper, 1987)

続いて、第七章「エトニーからネーションへ (From Ethnie to Nation)」では、近代化に伴ってあらゆるエトニーが政治化し、そのほとんどがネーションを志向するようになっていくプロセスが分析される。その際、水平的－貴族的エトニーで貴族階級やエリートがそのネーションに多くの人々を取り込もうとする「包摂 (inclusion)」と、垂直的－民衆的エトニーで宗教的・エトニー的共同体を政治的な単位にしようとする「動員 (mobilization)」という二種類の過程がしばしば見られた。彼は、ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへという近代化の捉え方は、エトニー的なものの消滅を含意していた点で破綻しているが、ネーションを志向する場合はもちろん、そうでない場合にもエトニーが政治化し、市民的モデルを無視できなくなっている点ではゲゼルシャフトが形成されているとも言えるという。ここでもあらゆるものを否応なくその中に取り込んでしまう近代性の本質が明らかにされているが、スミスはそのようなフーコー的な方向には深く踏み込まない。彼はむしろ、ネーション形成における文化の役割に着目する。すなわち、前近代の一部のものにしか接近可能でなかった神学的知識から、原則としてすべての人に解放された科学的知識へと文化の中心が移行し、聖職者に代わって知識人がその指導者となっていったというのだ。そうした経緯から歴史学・文献学・考古学など、ネーションの歴史性・同質性を研究・証明するための学問分野が盛んになっていったのであり、社会学の近代性や共同体といった問題関心のあり方も例外ではないという。

この文化的側面を、更にクローズ・アップして論じているのが第八章「伝説と風景 (Legends and Landscapes)」である。常に新たなイノベーションを目指しながら過去への郷愁も合わせ持つという近代社会のパラドックスに対しては、①過去を前例として社会の変化の度合いを測りそれを正当化するため、②過去への郷愁はエトニーに内在するものであり、近代に限らず普遍的に見られる現象である、③近代社会が生み出す疎外感やアノミーの解消のため、といった解答が用意されるが、それではなぜ、それがネーションのようなある範囲・地域に限定されたものとして現れるのだろうか。この問いに対しては、①何らかの始原と歴史を持つ集団を規定することで人間存在の不確定性・無意味さを克服するため、②歴史と運命を持つ集団に所属することで、その共同体において自己の生命の

限界を越えて過去から未来へと広がる時間の流れの中で生き続けられるため、といった答えが考えられる。前者はエトニーに対する説明ともなり得、普遍的であるのに対して、後者は近代以前には宗教が担っていた役割であり、近代以降ここでもネーションが宗教に取って代わったといえる。そのようなネーションの役割のために、過去とか歴史が重要なものとなり、道徳的モデルとして、あるいは自己の存在を確認するための救済のドラマとして利用されることになる。そして、そのミソモチュールによく取り込まれるのは「建国の父」の時代と「黄金時代」、さらに自国の自然の風景のすばらしさであり、それらは常に再構成・再構築されていくという。ここには、ホブズボームの「伝統の発明」論の影響が窺えるが、スミスは、実際には純然たる捏造は少なく、ある程度の事実が脚色される場合がほとんどで、また各ネーションによる歴史的資料の蓄積の多少も大きく関係すると指摘している。(Hobsbawm, 1983: 一九九二年)

以上の第一部・第二部の議論を総合した結論部分に当たる、第九章「ネーションの系譜学 (The Genealogy of Nations)」では、ネーションがその根源でエトニーとつながっていることが確認される。第一章でも論じているように、ネーションやエスニシティーの研究においては、それを静的・普遍的とする立場と動的・可変的とする立場があるが、彼は、この立場の相違は現象の異なる側面に着目することから生じるのだという。実際には、それらがまったく不在であったり社会的役割を持たなかった時代がなかったことも事実であり、それらが再生したり再構成されることや、政治的単位としての資格を持つ唯一のものでないことも事実である。しかし、ネーションの象徴レベルに目を向けると、それがエトニーのミソモチュールと極めて似通っており、ネーションは近代主義者が言うほど新しいものではないことがわかる。というのも、ネーションが集団として凝集力を持ち、生き残っていくためにはエトニー的要素は不可欠であり、ネーションの中核にはエトニーと同様のミソモチュールが存在するからである。ネーションはエトニーに比べて包括的・市民的・民衆的であり、コミュニケーションの手段も進んでいるなど、近代的な特徴を備えているが、それは形態上の違いであり、その内実たる感情レベルではそれほど違いはなく、ネーションはエトニーを発展させたものに過ぎないというのが彼の結論である。その証拠として、例えば過去の黄金時代を求める感情が普遍的であるように、ミソモチュールの内実はエトニーからネーションへと移行してもほとんど変わっておらず、その登場人物やストーリーなどの表面的なことだけが変化していることが挙げられ、彼が象徴レベルに注目したことの意義が確認される。(Kellas, 1991, p. 49) エトニーやネーションの可変性と永続性のダイナミズムが見いだされるのは、ミソモチュールの中においてであるのだ。そして彼は、現在もネーションを志向するがそれに至らないエトニーや一国内でマイノリティーとしてさまざまな不満を持つエトニーは多く、それが今後の国際社会における安全保障

にどのような影響を与えるかは予断を許さないが、それが人間社会に普遍的なエトニーの要素を持つことを常に忘れてはならない、と警告して論を閉じる。

スミスが、以上のような壮大な議論で証明しようとしたのは、人間が歴史性を持つ集団、つまり自らの存在の不確定性・限定性を縮減してくれるような集団に所属することを欲する感情は普遍的なもので、前近代ではエトニーが近代以降はネーションがその役割を担ってきたのであり、この意味で両者は連続性を持ち、さまざまなミソモチュールがそのことを証明しているのだということであろう。この種の文明論は、その扱う領域の広さから細かい欠点の指摘はいくらでもできるものであり、スミスほどの学識をもってしてもこの点は例外でない。そこで、彼の議論の大枠に注目してみると、まず問題になるのは彼がエトニーと呼ぶような集団、特に民衆のエトニーが本当に存在していたのかと言う点である。前近代においては現実的な生活世界と観念的な宗教世界が一致していない場合が多く、この場合人々のアイデンティティーがどちらかに強く集まっている場合以外は、彼の言うエトニーは分裂したものとしてしか存在できないだろう。また、仮にそのような集団が普遍的にあったとして、ネーションの方も彼が言うほど一元的であるとは思えない。人々はローカルなレベルからナショナルなレベル、更にレイシャルなレベルまで重層的にアイデンティティーを付与しており、ネーションが弁別されるのはその市民権などの近代的価値によってである。それゆえ、それがエトニーの感情を受け継いでいると一般的に言うことはできないだろう。しかし、実際に何らかのムーブメントの主体としてネーションが立ち現れてくる時、それがエトニー的感情に強く彩られていることが多いのは事実であり、この点ではスミスの言う連続性が認められる。彼の議論は、その控えめな企図通り、ネーションがまったく近代的なものであるという近代主義者の足場をぐらつかせることには成功しており、彼が近代主義・道具主義全盛のナショナリズム研究に投げかけた疑問はしかと受けとめられるべきであろう。

参考文献

- Anderson, B., 1983 *Imagined Communities*; Reflections on the Origin and Spread of Nationalism, (Verso) (白石 隆 白石さや訳、一九八七年、『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行——』、リプロポート)
- Gellner, E., 1983 *Nations and Nationalism*, (Cornell University Press)
- Hobsbawm, E. J. and Ranger, T. (eds), 1983 *The Invention of Tradition*, (Cambridge University Press) (前川啓治 梶原影昭 他訳、一九九二年、『創られた伝統』、紀伊國屋書店)
- Hobsbawm, E. J., 1990 *Nations and Nationalism Since 1780*, (Cambridge University Press)
- Kellas, J. G., 1991 *The Politics of Nationalism and Ethnicity*, (Macmillan Education)
- Kuper, A., 1987 'United Nations?' in *Times Literary Supplement*, No. 4939
- Smith, A. D., 1971 (2nd ed 1983) *Theories of Nationalism* (Holmes & Meier)

- 1973 *The Concept of Social Change; A Critique of the Functionalist Theory of Social Change*, (Routledge & Kegan Paul)
- 1979 *Nationalism in the Twentieth Century*, (Martin Robertson)
- 1991 *National Identity*, (Nevada University Press)
- Weber, E., 1979 *Peasants into Frenchmen; The Modernisation of Rural France, 1870-1914*, (Chatto & Windus)

(つつい きよてる・修士課程)